

九州産業大学美術館



平成27年度

文化庁「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」

実施報告書

ふくおか博物館人材育成事業実行委員会
(九州産業大学美術館、九州大学総合研究博物館、福岡市博物館、福岡市美術館、CLCworks)

現状課題の把握

1

2020年の東京オリンピック・パラリンピック競技大会を控え、地域の文化芸術を訪日外国人に紹介する拠点として、国際的に遜色のない博物館の活性化は急務な課題である。

2015年5月に閣議決定された「文化芸術の振興に関する基本的な方針(第4次基本方針)」の「第3-9文化芸術拠点の充実等(2)美術館、博物館、図書館等の充実」では「地域の美術館、博物館等の館種や設置者の枠を超えた連携・協力を促進する」「美術館、博物館等の質の高い活動を支える人材

を確保するため、学芸員や教育普及等を担う専門職員の研修の充実を図る。また、美術館、博物館等の管理・運営や美術作品等の保存・修復、履歴の管理等を担う専門職員を養成するための研修の充実を図る」という施策を提示している。

しかし、現在全国で働く6,000名を超える学芸員は、研修場所が東京で、さらに2泊3日程度で研修会が開催されることから、予算面はもちろん、学芸業務をほぼ一人で担当しているため、なかなか研修に参加できない状況がある。こうしたケースの解消方策

として、各地域に学芸員養成課程を開講する大学(平成25年4月1日現在、300大学)と附属機関に博物館実習施設を有する大学博物館(平成26年度現在、約100館)を活用することが考えられる。

今回、九州産業大学美術館が中核館となり、構成団体の協力を得ながら研修プログラムを開発し、学芸員リカレント教育の場となる大学で研鑽を積むことで、地域毎の国際的に遜色のない高度博物館人材育成に係る新たな教育モデルの構築が期待できる。

事業の目的

2

事業の目的は、現状の課題を解決するために、学芸員養成課程を開講する九州産業大学、そして博物館実習施設を有する九州産業大学美術館が中核となり、国際的に遜色のない高度博物館人材育成に係る新たな教育モデルの構築を目指すことである。そのため、①博物館資料を「守る技術(保存・修復)」「調べる技術(調査研究)」「見せる技術(展示)」「伝

える技術(教育普及)」「活かす技術(運営)」修得に関する研修会を実施するとともに、②グローバルな視点を享受するための海外の博物館関係者との交流の機会を設け、さらに③異なる館種の学芸員が協働してリレーワークショップを実施する。これら3つの事業を九州産業大学美術館が中核館となり実施することで、地域毎の安定した研修環境の確保を目指したい。

なお事業目的達成のため、九州産業大学美術館が中核となる大学博物館、地域博物館、市民団体が構成するふくおか博物館人材育成事業実行委員会を組織し、事業の計画、実施運営、評価検討改善(PDCAサイクル)を統括していく。

事業の構成

3

事業は、ふくおか博物館人材育成事業実行委員会の統括の下、次の事業を実施する。

高度な博物館人材育成のための学芸員技術研修会事業

博物館資料について「守る技術(保存・修復)」「調べる技術(調査研究)」「見せる技術(展示)」「伝える技術

(教育普及)」「活かす技術(運営)」が修得できる、実践的な研修機会を提供する。

グローバルな博物館人材育成に向けた国際フォーラム事業

海外の博物館関係者を招聘し、地域博物館の学芸員が博物館学の先進事例を学ぶ講演会、シンポジウムを提

供するとともに、交流を通じてグローバルな視点を享受できるようにする。

館種が異なる博物館が連携したリレーワークショップ事業

国内外の先進事例調査を基に、中核館と歴史系、美術系、科学系博物館、市民団体が同じテーマで、リレー式のワークショップを実施する。

組織体制

4

実行委員会名簿

委員長 釜堀 文孝(九州産業大学美術館・館長)
副委員長 三島 美佐子(九州大学総合研究博物館・准教授)
委員 松村 利規(福岡市博物館・主任学芸主事)
委員 鬼本 佳代子(福岡市美術館・主任学芸主事)
委員・監事 坂倉 真衣(生涯学習団体「CLCworks」・副代表)
委員・監事 三宅 基裕(海の中道海洋生態科学館・展示部学習交流課次長)

事務局名簿

事務局長 緒方 泉(九州産業大学美術館・教授)
事務局次長 永井 浩一(九州産業大学産学連携支援室・室長)
事務局員 落合 桃子(九州産業大学美術館・学芸室長)
事務局員 太田 恵子(九州産業大学産学連携支援室・室員)
事務局員 松村 裕子(九州産業大学産学連携支援室・室員)

資料:九州博物館協議会加盟館に所属する学芸員の研修実態調査アンケート結果

実行委員会は、本事業の実施に先立ち九州博物館協議会加盟館する学芸員に対して、以下のようなアンケート調査を実施し、研修プログラム開発の資料とした。
○実施時期:2015年5月~6月
○方法:質問紙を郵送、FAXにて回答
○対象:九州博物館協議会加盟館(100館)所属の学芸員
○回答数:153名の学芸員から回答を得る
○主な質問事項:過去3年間の研修の有無、研修を受けない理由、受けてみたい研修分野など。

現場学芸員が求める研修分野のトップ3は①資料保存②資料修復③展示制作で、その後写真撮影、照明技術、教育、情報メディア、展示グラフィック、広報、博物館経営、ユニバーサルミュージアム、事務、ボランティアが続いた(表1)。
また、参加できない理由は①研修会場が遠い②時間がない③研修の予算がない④日程が合わないことに集中した。さらに個別の意見として、「日常業務で精一杯で、研修参加までの余裕がない」「どこでどのような研修が行われているのかわからない」「当館のような小規模館が必要と

している内容の研修が少ない」などが上がった。こうした研修実態を受けて、今回の研修プログラムは「展示制作」「展示グラフィック」「照明技術」「博物館科学」「ミッションステートメント」「ユニバーサル・ミュージアム」「アート教育」「著作権」の8分野で企画することとした。

Contents

1 現状課題の把握	01
2 事業の目的	01
3 事業の構成	01
4 組織体制	02
5 学芸員技術研修会事業	03
6 国際フォーラム事業	13
7 リレーワークショップ事業	14

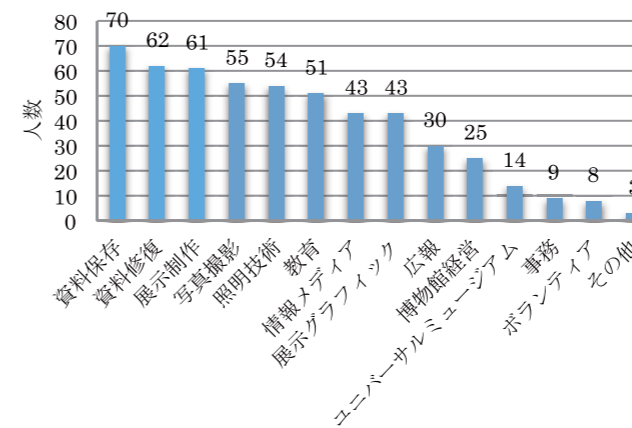


表1 現場学芸員が求める研修分野(複数回答可)

学芸員技術研修会スケジュール

5

平成27(2015)年度学芸員技術研修会日程一覧表

番号	研修内容・開催日	開催場所	講師
①	展示制作 2015年7月22日(水)	福岡市博物館	洪 恒夫 (東京大学総合研究博物館客員教授)
		福岡市博物館	松村 利規 (福岡市博物館主任学芸主事)
		福岡市博物館	藤本 和美 (田川市石炭・歴史博物館学芸員)
②	ミッションステートメント 2015年9月21日(月)	福岡市美術館	新藤 浩伸 (東京大学大学院教育学研究科講師)
③	博物館科学 2015年10月7日(水)	九州国立博物館	本田 光子 (九州国立博物館特任研究員)
④	展示グラフィック 2015年11月18日(水)	熊本県立美術館	熊谷 淳一 (株式会社 ノイエデザイン代表取締役)
⑤	博物館と著作権 2015年12月2日(水)	九州産業大学	福井 健策 (弁護士、ニューヨーク州立弁護士、 日本大学芸術学部客員教授)
⑥	アート教育 2016年1月12日(火)	九州産業大学	齊 正弘 (元宮城県美術館教育普及部長)
⑦	ユニバーサル・ミュージアム 2016年1月20日(水)	佐賀県立美術館	広瀬 浩二郎 (国立民族学博物館准教授)
⑧-1	照明技術(基礎編) 2016年2月9日(火)	九州産業大学	藤原 工 (株式会社 灯工舎代表取締役)
⑧-2	照明技術(中級編) 2016年2月10日(水)-2月11日(木)	九州産業大学	藤原 工 (株式会社 灯工舎代表取締役)

学芸員技術研修会

5

①「展示制作」

■ テーマ

展示はコミュニケーションであるという考えに基づき、来館者をもてなす展示手法について、実際の展覧会を見学しながら学びます。

■ 講師

洪 恒夫(東京大学総合研究博物館客員教授)
松村 利規(福岡市博物館主任学芸主事)
藤本 和美(田川市石炭・歴史博物館学芸員)

■ 開催日時

2015年7月22日(水)10:30~17:00(10:00~受付開始)

■ 開催場所

福岡市博物館

■ 内容

10:30 開会挨拶・自己紹介 10:50 事例紹介「展覧会の作り方-山本作兵衛の世界展を事例として-」松村利規、藤本和美 11:50 「山本作兵衛の世界展」会場見学(松村講師、藤本講師の案内 12:40 昼食 13:30 グループワーク(ここはいいなあ【I like】、ここはこうしたいなあ【I wish】法で展覧会の成果と課題を検証する) 14:00 グループ発表(松村講師、藤本講師からコメント) 14:30 講義「展覧会の作り方」で留意したいこと」洪恒夫 15:20 休憩 15:30 グループワーク「もう一度展覧会を見てみよう」 16:10 全体ふりかえり「今日学んだことを活かそう」(洪講師からコメント) 16:55 閉会挨拶 17:00 終了

■ 受講者数

36名(福岡10、佐賀6、熊本8、長崎2、大分3、宮崎1、鹿児島4、京都1、滋賀1)

■ 事後アンケート

質問1.

今回の研修会で洪先生の講義から学んだことは何ですか？

・洪先生の講義の中でも特に、「展示することはもてなすこと」「料理に見立てた展示づくり」「メニュー・仕込み・料理・ふるまい・もてなし」という料理の流れは、展覧会を作る場合も一緒だというお話がとても印象的だった。今後展示をする時や解説をする時にはいつでも、おもてなしの心を持つようにしようと思った。

・展示を成功させる数々の要素や留意点を学ぶことができた。また、空間そのものをどのようにとらえているか、という空間の考え方や、導線のタイプ、構成例、そして最後に見せていただいた洪先生の手書きノートの書き込みも含めて、これまでの様々な展示のキャリアがなければ聞くことが出来ない内容で大変興味深かった。

質問2.

今回の研修会について、参加して良かったなあと
思う点があればお書きください。

・グループワークで、他館の方の展覧会の感想を聞くことができ、自分のみの考えではなく、多視点で展覧会を鑑賞することができた。講義のみではなく、情報交換会などで他館や講師との交流ができたことも有意義だった。

・研修に展覧会見学が盛り込まれ、担当者の声が聞けたことと、実践例が聞けたこと。また、他館の学芸員と知り合いになれたことなど、また参加したい研修内容だった。



5-1

学芸員技術研修会

5

② 「ミッションステートメント」

■ テーマ

教育基本法、社会教育法、博物館法などを読み解きながら、改めて博物館の使命を点検し、今後の博物館の在り方を考えます。

■ 講師

新藤 浩伸(東京大学大学院教育学研究科講師)

■ 開催日時

2015年9月21日(月)10:25~17:00(10:00~受付開始)

■ 開催場所

福岡市美術館

■ 内容

10:25 開会挨拶、日程説明、講師紹介 10:30-10:55 自己紹介と各館の紹介 11:00-12:10 講義「地域社会におけるミュージアムの存在意義とは—法の体系からミュージアムを考える—」新藤 浩伸 12:10-13:00 昼食 13:00-13:30 グループワークの進め方説明、福岡市美術館のミッションの紹介 13:30-15:30 グループワーク 15:30-16:20 各班から発表 16:20-16:30 休憩 16:30-16:55 ふりかえり(各班で実施) 16:55 閉会挨拶 17:00 終了

■ 受講者数

20名(福岡11、佐賀2、熊本3、大分1、宮崎1、広島1、大阪1)

■ 事後アンケート

質問1.

今回の研修会で新藤先生の講義から学んだことは何ですか?
・「迷った時は基本に立ち返る」とよく言いますが、一つの事業で迷った時は要項に立ち返り、館の存在に迷った時はミッションに立ち返り、ミッションに迷った時は法律に立ち返るこ

と。また、基をただせば博物館は法律の下に成り立っているため、迷った時に法律からヒントを得ること。その法律もキーワードを拾いつつ、広く解釈していけば良いのだと感じた。

・ミッションステートメントを明らかにすることで部内は勿論、部外へも共通認識をもって活動に取り組むことができる、また情報を発信することができることを学んだ。

・法律や条令はどうしても我々にとって“縛り”であり“抑制”するものといったイメージが強いものだった。しかし、美術館の活動を他者に、特に美術館関係者以外の人に説明する際にそれらを“利用する”“使い倒す”ことで説得力を持たせることが出来る“武器”となることを学ばせてもらった。

質問2.

今回の研修会について、参加して良かったなあと
思う点があればお書きください。

・多くの同業の方との交流ができ、それぞれアプローチの仕方が全く違うことを実感し、協力すると面白いものが出来そうな気がした。やはり自館だけでなく、他館と連携していくことの大切さを改めて感じた。

・美術館、博物館に興味がない人へのアプローチを前向きに考えられたこと。しかし、今回の研修に期待していたことは、自館のミッションステートメントを客観的に述べて頂きたかったので少し残念だった。

5-2



学芸員技術研修会

5

③ 「博物館科学」

■ テーマ

劣化が進む酸性紙を用いた資料について、山本作兵衛炭坑記録画等の調査を基に、その保存方法について学びます。

■ 講師

本田 光子(九州国立博物館特任研究員、田川市世界記憶遺産保存等指導委員会委員長)

■ 開催日時

2015年10月7日(水)12:30~16:30(12:00~受付開始)

■ 開催場所

九州国立博物館

■ 内容

13:00 開会行事、自己紹介 13:30 講義「博物館資料の保存について—山本作兵衛コレクションの保存をとおして—」本田光子 15:00 休憩 15:15 施設見学(本田講師の案内で九州国立博物館バックヤードを見学する) 16:15 ふりかえり 16:55 閉会挨拶 17:00 終了

■ 受講者数

25名(福岡19、熊本2、大分1、宮崎1、鹿児島1、山口1)

■ 事後アンケート

質問1.

今回の研修会で本田先生の講義から学んだことは何ですか?

・酸性紙の課題について、具体的に数値等も含めて認識することができた。具体的に自館の課題も見えてきた。その上での可能な対策についてもヒントをいただいた。資料の材質の性格上、劣化や変質は免れないものである以上、如何に現状維持をしていくのか、また、資料の価値の本質に合わせて何を後世に伝えるのかを改めて整理し、記録・保存する必要があると感じた。

ると感じた。

・まず、本田先生の経験と知識に裏うちされた資料保存への姿勢と実践。次に、最新の研究成果を取り入れて資料保存に取り組みながら、あくまでも資料を未来に保存していくためにはどう資料と向き合っていくのか、日々考え、試行錯誤しながら、真摯に取り組んでいくという姿勢。加えて、中途半端に判断せず、その専門分野のエキスパートの方にきちんと相談し指導をうけることなどを学んだ。

質問2.

今回の研修会について、参加して良かったなあと
思う点があればお書きください。

・資料と向き合う姿勢について改めて意識改革が必要であると思った。整理、保存と台帳作成と企画展示を数年来、行っていたが、資料の素材についてまでは十分な配慮ができておらず、不十分な点を痛感した。近現代資料が中心で不明な点も多く、悩みながらの保存、展示になっていたが、講義のまとめにあった「資料の価値を理解しようとする、材料や構造を知ろうとすること」にもっと努めねばと感じた。

・研修の資料のなかにあった『資料の価値を理解しようとする。資料の素材や構造を知ろうとする。収蔵や展示の環境を把握すること』が印象的だった。様々な作品がある中で、それらを100%理解することは大変難しいことだ。しかし、「理解しようとするその姿勢が重要である」と本田先生からお話を伺えて良かった。

・当館も近現代資料を数多く収蔵しているので、まずは出来ることから、来年度、中性紙袋を可能な限り購入して、資料整理を進めていきたい。



学芸員技術研修会

5

④ 「展示グラフィック」

■ テーマ

伝わるチラシ、ポスター、キャプションについて、画面構成、文字、色調などのグラフィックデザインの基本を学びます。

■ 講師

熊谷 淳一（株式会社 ノイエデザイン代表取締役）

■ 開催日時

2015年11月18日（水）10:00～17:00（9:30～受付開始）

■ 開催場所

熊本県立美術館

■ 内容

10:00 開会挨拶 10:05 自己紹介 10:30 【グループワーク1】
チラシの相互評価 10:55 講義「チラシづくりの基礎1」
11:40 【グループワーク2】チラシの改善点 11:55 昼食
12:55 【グループワーク3】発表 13:40 講義「チラシづくり
の基礎2」 14:25 休憩 14:40 講義「展示グラフィックの
基礎」 15:55 休憩 16:05 講義「ホームページ作成上の留
意点」 16:50 ふりかえり、閉会挨拶 17:00 終了

■ 受講者数

13名（福岡4、熊本6、鹿児島3）

■ 事後アンケート

質問1.

今回の研修会で熊谷先生の講義から学んだことは何ですか？

・博物館もマーケティングや経営を学ばないといけない、とのお話にあったとおり、お客さんと向き合い、戦略をもってデザインをしなければいけないと感じた。お客さんが幸せになるため、館や展示の魅力をもっと伝える広報物を作り、読みやすいパネルを作るため、館全体で客観的に館や企画に対する

意見を出し合って形にしていくことが大事だと思った。

・講義では基本的なところからお話をいただき大変勉強になった。特に印象に残ったのは「お客さんにとってのメリット」をチラシの表面でアピールするという点。この点は一見当然のようですが、先生に言われて改めて自館・他館のチラシを見てみると、表面のみでは展示会の魅力を伝えきれていないものが多いことに気づいた。そして、その魅力を上手く伝えるために重要なのが「デザイン力」なのだと分かった。そのためにはデザイン力はもちろん、まずは担当学芸員がしっかりと展示会の世界観を持ち、何を最もお客さんに伝えたいのか明確にしなければならない。これは難しいことだが、上記の前提を基に先生から学んだデザインの基本を有効に活用し、今後に役立てていきたい。

質問2.

今回の研修会について、参加して良かったなあと
思う点があればお書きください。

・展示に関するグラフィック類を改めて色々な視点から考えたこと。また、デザイナー・熊谷先生の専門的視点を学べたこと。展示に実用的な要素が満載だったことがとてもよかった。・これまでは表面に展示会名と作品がドーンと載ったチラシが定型だと思っていたので、今回の研修を受けて自館・他館の展示グラフィックの見方が大きく変わった。また、先生が「新しいことをやらなきゃ」と言われたのも印象的で、お客さんに伝わる展示グラフィックを目指して色んな工夫をしていきたいという使命感を持つことができた。



学芸員技術研修会

5

⑤ 「博物館と著作権」

■ テーマ

博物館の著作権について、その基本的な知識、そしてこれまでの判例や現在のTPP交渉の動向も踏まえながら、その留意点を学びます。

■ 講師

福井 健策（弁護士、ニューヨーク州立弁護士、日本大学芸術学部客員教授）

■ 開催日時

2015年12月2日（水）12:30～16:30（12:00～受付開始）

■ 開催場所

九州産業大学本館3階大会議室

■ 内容

12:30 講義「著作権を考えることは未来を創造すること」
14:30 休憩 14:45 演習「博物館関係者が知っておくべき
権利と法律」（福井先生が学芸員の疑問に応える） 15:50
休憩 16:00 アンケート記入 16:25 閉会行事 16:30
終了

■ 受講者数

44名（福岡20、佐賀3、熊本11、長崎1、大分1、宮崎2、鹿児島2、大阪1、奈良1、東京2）

■ 事後アンケート

質問1.

今回の研修会で福井先生の講義から学んだことは何ですか？

・著作権と所有権の違い。根本的なところだが、明確に理解できた。著作権侵害になったら困るという考え方で消極的になることが多いが、受講して正しく知識を身につけて積極的に情報発信していくことの重要性を感じました。

・著作権についての基本的な考え方を十分学ぶことができた。著作物から除かれる情報について、詳しく説明いただいたことは有益であった。またTPPなどの今日的なテーマについて学べる貴重な機会となった。

質問2.

今回の「著作権」の研修を受けて、今後、自館はもちろん、他館の展示会や教育プログラムなどで気をつけたい著作権のポイントは何か？

・第一に権利処理コストをどのようにするかという問題、第二に非親告罪化への対応をいかにすべきかという点、改めて考えなければならないと思います。
・当館では写真を扱うことが多いため、その扱い（著作権、許諾関係）は今後さらに留意したいと思います。
・「許可を取る」ことばかり目がいっていましたが、「許可のいない場合」の方をしっかりと頭に入れておきたいと思いました。

質問3.

今回の研修会について参加して良かったなあと
思う点があればお書きください。

・著作物についてあいまいな理解のままにしてきたことが危険であると再認識できた。
・著作権の保護年数が延びることに対してメリットばかりではないことが分かりました。分かりやすく、重要な情報を得ることができたので、参加して良かったです。
・職場での著作権に対する認識は低く、私自身それを説明できないことが多くありました。今後、著作権について周りの者に説明できるよう参考にさせていただきます。



学芸員技術研修会 5

⑥ 「アート教育」

■ **テーマ**
美術としての教育、教育としての美術について、宮城県美術館の実践活動を体験することを通じて学びます。

■ **講師**
齊 正弘(元宮城県美術館教育普及部長)

■ **開催日時**
2016年1月12日(火)10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ **開催場所**
九州産業大学15号館15202教室

■ **内容**
10:00 自己紹介 10:30 講義「ミュージアムにおけるアート教育の意義」講師:齊 正弘 11:50 昼食 12:40 ワークショップ1「美術館探検、大学探検」講師:齊 正弘 14:10 ワークショップ2「齋さんとたくさん話すためにグループで相談しよう」 15:00 休憩 15:15 ワークショップ3「齋さんとワークショップやアート教育についてたくさん話そう」講師:齊 正弘、司会:緒方 泉(九州産業大学美術館教授) 16:55 閉会行事 17:00 終了

■ **受講者数**
29名(福岡21、佐賀1、熊本4、長崎2、宮崎1)

■ **事後アンケート**
質問1.
今回の研修会で齋先生の講義から学んだことは何ですか?
・個人的なことでは恐縮ですが、地元で宮城県美術館があったことから、幼少期に家族や学校で訪れた直接的な美術館での体験と、大学時代に学芸員実習先として実習をさせていただいた体験と、その後社会経験を経て現在大学院での学び

の機会を得てからの講演会という、齋先生の実践を異なる機会と角度から改めて学ばせていただきました。自分で見て学んだりすることの楽しさを教えてくれた原体験の裏側には、ビックリする練習や、物事は本当にそうだろうか?と問いかけてくれた人、知りたくなったら自分で探せるように必要な時に相談に乗ってくれた人の存在や場所があったということです。いつ訪れてもアトリエを自由に使うことができ、日常と繋がっていて、いつでも相談に乗ってくれる人が居る美術館が地元にあったことで、そんな思いのつまった場所で幼少期を過ごせたことがとても嬉しく誇りに思いました。

質問2.
午後の齋正弘先生の探検で学んだことは何ですか?
・トトロの森に行くぞ!と連れられ、植え込みの脇といった道ではない道を歩くという体験などから、見方一つで世界の面白さに気づく可能性があることや、美術館はそうした好奇心を刺激してくれる大きな可能性を持った場所である、ということを再認識しました。
・子どもの立場に立って企画を考えるということです。そしてどういった体験をさせると面白い大人になるのかを考えることが大事だと思いました。また、自分自身が子どもの頃にわくわくした体験がなんであったか?そこに答えがあるのだなと納得しました。そう考えていくと、子どものための教育活動のつもりで、いつのまにか学校教育と大差ないことをやっていることに気づきました。自分が子どもの頃に、野原に秘密基地を熱中して作っていた頃を思い出して、活動を考えていきたいと思いました。ちょっとドキドキする体験を考えてみたいと思います。



学芸員技術研修会 5

⑦ 「ユニバーサル・ミュージアム」

■ **テーマ**
ハンズオン展示の向こう側にあるユニバーサル・ミュージアム像について、手学問の視点から学びます。

■ **講師**
広瀬 浩二郎(国立民族学博物館准教授)

■ **開催日時**
2016年1月20日(水)10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ **開催場所**
佐賀県立美術館

■ **内容**
10:00 自己紹介 10:30 講義「さわって楽しむ博物館-ユニバーサル・ミュージアムの六原則」講師:広瀬浩二郎(国立民族学博物館准教授) 11:30 グループワーク1「ユニバーサル・ミュージアムの六原則を考える」 12:10 昼食 13:00 グループ発表(各グループからの発表に対して広瀬先生がコメント) 14:00 ワークショップ「さわる広さと深さを探求する<実際に作品にさわってみよう!>」 15:00 グループワーク2「なぜ“さわる”ことが必要なのか」 15:40 休憩 15:55 グループ発表と全体討論(広瀬先生と参加者との意見交換) 司会:緒方 泉(九州産業大学美術館教授) 16:55 閉会行事 17:00 終了

■ **受講者数**
19名(福岡11、佐賀5、熊本1、長崎1、鹿児島1)

■ **事後アンケート**
質問1.
今回の研修会で広瀬先生の講義から学んだことは何ですか?
・ユニバーサル・ミュージアムの根本的な考え方を、改めて確

認することができました。感覚の多様性が尊重されるミュージアム、うるさい(対話が盛り上がる)博物館・美術館がよいというお話が心に刻まれました。
・ユニバーサル・ミュージアムとは、障害者対応とは異なるということ。ユニバーサル・ミュージアムは、展示やイベントの構成に視覚障害者の感覚を取り入れた展示。さまざまな感覚を展示に取り入れることでミュージアム全体の発展につながる。
・ユニバーサル・ミュージアムは、さわることを前提とした展示のこと。一方的な情報提供ではなく、対話型の展示手法であることを学びました。

質問2.
午後の広瀬浩二郎先生の触察体験で学んだことは何ですか?
・作品に対して垂直に立つ、ゆっくり触る、質感や温度を感じる…など具体的なHOW TOを学べたことに加え、何よりも現場のグループ感を味わえたことが大きい経験となりました。実は、本や映像で拝見した際には、果たして私にできるのだろうかかと漠然とした不安を持っていましたが、今回、背中を押していただいたような気がします。2月、早速実践の場があるので活かしていきたいと思います。
・視覚以外から情報を得ようとする予想以上に頭を使うということが分かった(脳の普段使わない部分を使った気がする!)。案内役も難しかった。相手が何を知りたい・感じたいと思っているのか、どうすれば相手に伝わるか、先回りしている考えた。しかし、あれこれ解説しようとするよりも基本的には相手のペースに合わせる大切だと気づいた。また、この体験後、モノをよく観察するクセがついた。



学芸員技術研修会

5

⑧-1「照明技術(基礎編)」

■ テーマ

LEDの基本的な知識、そしてLEDを使った部分空間演出について、実際の美術館で、平面作品、立体作品を用いて実地検証します。

■ 講師

藤原 工(株式会社 灯工舎代表取締役)

■ 開催日時

2016年2月9日(火)10:00~17:00(9:30~受付開始)

■ 開催場所

九州産業大学2号館2E404教室、九州産業大学美術館

■ 内容

10:00 自己紹介、「展示照明」の悩みの共有 10:30 講義「照明の基礎を知る」 12:00 昼食 13:00 グループワーク①(5つの班に分かれ、平面・立体作品の照明作業を行う) 15:00 休憩 15:15 グループ発表・藤原先生の講評 16:00 グループワーク②(講評を受けて、部分修正) 17:00 終了

■ 受講者数

23名(福岡10名、佐賀1名、熊本3名、長崎2名、宮崎2名、鹿児島4名、京都1名)

■ 事後アンケート

質問1.

今回の研修会で藤原先生の講義から学んだことは何ですか?

・照明を客観的に判断する基準(色温度や演色性)や、作品を守るために気をつけること(有害光線を遮断、退色を防ぐための照度制限)など、博物館・美術館で展示・保存に関わるうえで欠かせない基礎的な事項を学習した。また導入が進んでいるLED照明の仕組みや種類、それぞれの光線に特徴的なこと、作品のために気をつけることを学んだ。

・可視光線領域でも作品を損傷する波長があることや、作品

を正しく見せるために、色温度や、演色性、質感までを意識して照明をつくることなど、とても勉強になりました。また、LED照明機器の見極め方もとても参考になりました。

・光のストーリーという概念の存在です。方法論(技術)はいくつもあるかと思いますが、その元になる光のストーリーは目から鱗が何枚も落ちました。

質問2.

今回の研修会について、参加して良かったなあと
思う点があればお書きください。

・実際に作品を目の前にして照明を行うなかで、上手いかわからないことを、先生に直接質問することができ、その対策や効果をその場で体感することができたのが良かった。また、色温度の異なる照明や色彩照度計、スプレッドシート、ブラックラップなど、普段使用しない素材や機材に触れることができ、新しい知識や体験が広がった。また、藤原先生の照明への情熱から、照明によってこんなにも作品の特色が引き立つんだということを知ることができ、照明の醍醐味を実感できたことが何よりも良かった。

・照明の微妙な違いの見極め方や、チューニング材料の活用方法など、実践を通して学ぶことができました。また、他館の学芸員の考え方にも触れることができました。

・今回の研修会に参加して、作品の価値はそのものだけでなく、それを取り巻く空間とともに完成するということを学び、あらためて照明技術の重要性を知ることができました。

5-8



学芸員技術研修会

5

⑧-2「照明技術(中級編)」

■ テーマ

基礎編で学んだ部分空間演出を発展させ、中級編では平面作品、立体作品をまとめた全体空間演出について、グループワークを通じて実地検証します。

■ 講師

藤原 工(株式会社 灯工舎代表取締役)

■ 開催日時

2016年2月10日(水)10:00~17:00(9:30~受付開始)、
11日(木)10:00~16:30

■ 開催場所

九州産業大学美術館

■ 内容

【1日目】講義「人間の目の構造、明暗順応など」 10:30 グループワーク①(2班に分かれ、10点程の作品から展示・照明計画から展覧会を完成させるテーマが与えられ、作業開始) 12:00 昼食 13:00 グループワーク②(作業継続) 15:30 各班から進捗状況発表、藤原先生から講評 16:00 休憩 16:15 グループワーク③(講評を受けて、各班修正作業) 17:00 終了 【2日目】 10:00 グループワーク④(各班で今後の作業方針確認、作業開始) 12:00 昼食 13:00 各班進捗状況発表、藤原先生から講評 13:20 グループワーク⑤(講評を受けて、各班修正作業) 15:40 休憩 16:00 各班展覧会発表 16:30 終了

■ 受講者数

15名(福岡8名、佐賀1名、熊本1名、長崎1名、宮崎1名、鹿児島2名、京都1名)

■ 事後アンケート

質問1.

2日間の実習で学んだ照明技術(考え方、ちょっとした工夫)は何ですか?

・照明は角度を変えたり覆いを被せたり、フィルターを加えることで、1点1点作品を変化させることができることに気づいた。また、先生が「作品の可能性」を引き立てるとおっしゃっていたのが印象的だったが、実際に作品を見ながら、こういう照明を当てたらそ

う見えるかもしれないというプラスアルファの部分を想像しながら、ハレの場での照明を形作っていくことが大切だということ学んだ。

・作品を生かすための照明として、作品の一部をより明るく見せるライティングや、作品の影を生かすライティング。また、空間を自然光に近づけるライティングや、導線をつくるライティングなども工夫しました。

質問2.

今後、自分たちの館で試してみたい照明技術は何ですか?

・美術館に相応しいLED照明の条件が分かったので、導入を積極的に検討したい。色彩が生きて色温度のスポットを付属で当てたり、よりナチュラルな照明のためにスプレッドシートなどを使用してみたい。

・来年度から新たにLED照明を導入するので、館のコンセプトを生かせるような展示空間を作っていきたい。特に民俗の展示が多いので、月明かりで行われる民俗行事のスポット照明では、色温度を高め設定したり、フィルターを使って他との違いを出すなど、展示に合わせたメリハリのある照明を用い、展示物の良さを引き出させるように取り組んでいきたい。

質問3.

今後、他館の照明を見る時に、どんな点を気にかけて見ますか?

・色温度が展示しているものに相応しいか、素材と照度は適合しているか、光は全体にあたっているかなどのベーシックなことに加えて、この照明にはチカラを入れているなど、拘りポイントがないかも気にしてみたい。また自分だったらどうするなど、異なる照明を当てたときの作品の見栄えを想像しながら鑑賞してみたい。

・色温度と光の方向、そして作品を生かしている照明になっているか等を意識して見ていきたいです。

・まず展示空間に光のストーリーが作られているのかを考え、照明から自分がどのような印象を受けるのか、意識を向けるようにしたい。また、照明が見学の邪魔になっていないかなど、来館者としての視点からも気にしてみたい。



グローバルな博物館人材育成に向けた国際フォーラム事業

6

国際フォーラム

■ 開催日時

2016年2月19日(金)10:00-17:00

■ 開催場所

九州産業大学1号館7階大会議室

■ 内容

9:30 受付開始 10:00 開会挨拶

10:10 講演「ミッションステートメントと博物館教育活動 - ニューヨーク・ブルックリン美術館の事例 -」

Radiah Harper(ブルックリン美術館 教育副部長)

11:40 質疑応答 12:10 昼食 13:10 フォーラム開会挨拶
フォーラム「博物館は地域社会の一員ですか? - 博物館の設置理念を問い直す -」

パネリスト Radiah Harper(ブルックリン美術館 教育副部長)

パネリスト 鬼本 佳代子(福岡市美術館 主任学芸主事)

パネリスト 坂本 昇(伊丹市昆虫館 副館長)

モデレーター 緒方 泉(九州産業大学美術館 教授)

13:15 「事例紹介①」鬼本 佳代子 13:45 「事例報告②」坂本 昇 14:15 グループワーク(ファシリテーター: 染川香澄<ハンズオン・プランニング代表>)(各事例に対する意見交換、各班の質問事項の整理、質問用紙記入) 14:45 休憩(コーヒーブレイク、名刺交換) 15:20 各班からの質問用紙を基に、パネリストとの質疑応答 16:10 休憩 16:20 参加者全員によるふりかえり 17:00 終了

■ 受講者数

35名(福岡22名、佐賀1名、長崎1名、宮崎1名、鹿児島1名、山口1名、兵庫1名、大阪2名、滋賀2名、神奈川1名、東京1名、埼玉1名)

■ 事後アンケート

質問

あなたは国際フォーラムに参加して、どんな気づきを得ましたか。

① ハーパーさんの話から「博物館館員はオープンマインドで利用者に対応すること」そして「パーソン・センタード・ミュージアムを目指すこと」がこれからの博物館像につながるのだらうという印象を持ちました。

② アメリカのコミュニティミュージアムのミッションが時代のニーズに応えながら市民のためのミュージアムに変わろうと努力を重ねてきたことが、たくさん事例紹介を通してとてもよく分かりました。

③ 博物館は「地域に役立っている」だけではなく、「地域の一員として認められる」ようになると新たな展望が見えてくる、というパネラーの体験(伊丹市昆虫館)は貴重だと感じた。

④ 変わりゆく時代背景の中で、博物館は地域の人々にとってどのような存在であるべきか、どう進化していかなければならないか、を再考するきっかけになった。博物館が積極的にさまざまなコミュニティ・人々との関係を築き、中心に招き入れることでそれまでの関係の形を変え、地域に根差す重要性を再認識することができたフォーラムとなった。

⑤ 多様な来館者との対話を重視しながら博物館教育を推進することで、来館者にとって意味のある気づきと体験を生み出そうとしていることが強く伝わりました。



館種が異なる博物館が連携したリレーワークショップ事業

7

海外先進事例調査(アメリカ)

■ 実施期間

2015年8月18日(火)~8月24日(月)

■ 訪問先・対応者

米国・ニューヨーク

①ブルックリン美術館(Radhah Harper)

②クーバー・ヒューイット・スミソニアンデザイン博物館
(Kimberly Cisneros・Sakura Nomiya)

③ルービン美術館(Larissa Raphael・Dawn Eshelman)

④ホイットニー美術館(Pauline Noyes)

⑤バンク ストリート カレッジ(Nina Jensen・Brian Hogarth・Cathleen Wiggins)

⑥アメリカ自然史博物館(Jane Kloecker・Natalie Tahler・Jean Rosenberg・Daniel Zeiger)

⑦テネメント博物館(Kathryna Lloyd)

■ 調査者

鬼本 佳代子(福岡市美術館)、染川 香澄(ハンズオン・プランニング)、緒方 泉(九州産業大学美術館)

■ 調査報告

「ニューヨーク博物館・美術館調査報告~ミッションステートメントと教育活動」

近年、日本の博物館でも浸透してきたかと思うが、米国では、博物館はその館の社会的使命を宣言したミッションステートメントを作成しており、多くの場合ホームページ等公的な媒体に掲載されている。また、館全体だけでなく、部門ごとにミッションステートメントを掲げているところも少なくない。今回、6つの館を訪問するに際し、歴史、コレクション、ミッションステートメント、教育活動等について事前に調べたが、ミッションステートメントについて一つの共通する特徴があった。それは、物の保存や研

究ではなく、コレクションや教育活動を通じて、人々、さらに言うところ「個人」の経験を豊かにし、どう成長させるか、というような、より教育的なことがら、館全体の使命として掲げられていた点である。

実際に訪問してみると、例えばブルックリン美術館やクーバー・ヒューイット・スミソニアンデザイン博物館では、展示は、歴史的な流れではなく人々の生活や文化に関わるテーマで構成され、スタッフが常駐したり、デジタルツールを使用したりと、展示と各来館者がより親密な関わりをもてるようなサポートがなされていた。このような個々の利用者が、自身の経験に則して、自由にそして多様に鑑賞できるようにという試みは、他の館でも見られた。一方、テネメント博物館は、より積極的な方法でコレクションと来館者を結びつけている。同館はツアーでしか見学できないのだが、そこでは、アメリカの移民の歴史と生活を、ただ見学するだけでなく、当時の人々を演じるスタッフと会話をしたり、街に繰り出すことにより、まさに「体験」する。このような体験を通して、過去の出来事が遠いものではなく、現在の自分とつながっていることに気がつくのである。いずれの教育活動も、知識を学ぶのではなく、体験を通じて、より多様な思考と想像に誘うよう考えられていることは印象的であった。

ところで、全ての館のインタビューで話題に上ったのが「コミュニティとの関わり」である。各館ともコミュニティと対話する何らかの機会を持っているとことで、その対話を通して、ミッションステートメントを見据えつつ、それらを再解釈あるいは改変しながら、多様で複雑でそして変化の早い現代社会に現実的に対応するべく、教育活動や展示を構築していることがうかがえた。(福岡市美術館 鬼本 佳代子)



ブルックリン美術館



ブルックリン美術館



クーバー・ヒューイット・スミソニアンデザイン博物館

7-1

館種が異なる博物館が連携したリレーワークショップ事業

7



ルービン美術館



ルービン美術館



バンク ストリート カレッジ



ホイットニー美術館



ホイットニー美術館



アメリカ自然史博物館



アメリカ自然史博物館



アメリカ自然史博物館



テネメント美術館

またこうした展示の上下への拡張だけでなく、ケースを遠近の層として配置したマンチェスター博物館の自然史展示は、とても美しく、見る者の心を躍らせるものだった。テーマごとに独立したケースでありながら、背板を廃して反対側まで見通せるようにすることで、自然の奥深さが表現されているように思われる(写真4)。

こうした技術的な点を含め、まさに衝撃的だったのが「平和」と名づけられたケースだった。中には鶴の剥製と、原爆で溶けた硝子の小さなかたまり。そしてケースの内外に無数の折り鶴が舞っている(写真5)。自然史であるとか、歴史であるとか、芸術であるとか、そういったこと軽々と飛び越えた展

示である。まさに博物館の展示に向き合う姿勢を問われているような気がした。志と言ってもよい。

リバプール博物館では、社会を生きる多様な人々に焦点を当てた「人々の共和国」という展示エリアも印象深かった。その冒頭に掲げられた「足跡を残せ」という言葉は、この展示の核心を突く言葉だろう(写真6)。文字と語りを織り交ぜながら、人々が街に刻み込んできた生きざまを通して、リバプールという都市を描こうとする手法に、強い共感を覚えた。※文中の「平和」は「PEACE」、「人々の共和国」は「The People's Republic」、「足跡を残せ」は「Leaving your Mark」。(福岡市博物館 松村 利規)

1-2



マンチェスター博物館



産業科学博物館



ビートルズストーリー



ダルウィッチ絵画美術館



ロンドン市立大学動物学博物館



テート リバプール



写真-1



写真-2



写真-3



写真-4



写真-5



写真-6

海外先進事例調査(イギリス)

■ 実施期間

2015年10月31日(土)～11月7日(土)

■ 訪問先

英国・マンチェスター、リバプール、ロンドン

①マンチェスター:マンチェスター博物館、ウィットワース美術館、国立フットボール博物館、チェサムズ図書館、産業科学博物館、マンチェスターアートギャラリー

②リバプール:リバプール博物館、マージーサイド海洋博物館、ビートルズストーリー、ワールド ミュージアム リバプール、ウォーカー美術館、テート リバプール

③ロンドン:ダルウィッチ絵画美術館、ロンドン市立大学美術館・動物学博物館、王立芸術院

■ 調査者

松村 利規(福岡市博物館)、緒方 泉(九州産業大学美術館)

■ 調査報告

「イギリスの展示空間づくりに関する雑感」

イングランド北部で意欲的な展示を行っているマンチェスター博物館とリバプール博物館を訪れる機会を得て、特に記憶に残る事柄について簡単に記しておきたい。

まずこれらの館においては、展示というものが三次元の空間表現であるという意識が強く感じられたことが印象的だった。

リバプール博物館では、展示ケースの上部に動物や人の模型といった大型資料を配置する(写真1)一方で、ケース内に設置された解説板のさらに下、極めて低い位置を子供に向けたスペースとしている(写真2)。マンチェスター博物館では、考古資料を低い位置に展示し、子供がしゃがんで横から見たり、強化ガラスのケース上面に肘をつけて上から覗き込んだりする姿が見られた(写真3)。

館種が異なる博物館が連携したリレーワークショップ事業

7

館種が異なる博物館が連携したリレーワークショップ

実行委員会に所属する4団体が実施したリレー式ワークショップ(各団体1回ずつ計4回)は、「いろいろ」という共通テーマを設け、科学、美術、水族という各団体の特色を活かしたプログラムを開発した。参加者は4回とも同じで、九州産業大学学生(博物館実習生他)が制作補助者として活動に参加した。

参加者内訳:19名(中学1年3名、小学6年4名、小学5年1名、小学4年2名、小学3年3名、小学2年4名、小学1年2名)

「形のいろいろ ☆ 葉の形を見る、作る、かざる!」

1

■ 実施日時

2015年4月18日(土) 11:00~15:30

■ 実施場所

九州大学箱崎キャンパス21世紀交流プラザ

■ ボランティア学生数

8名

九州大学総合研究博物館では自然を観察しながら葉っぱの形や生態について知るツアーの後、粘土で葉っぱの形のブローチを作った。



学生と一緒に植物観察ツアー	採集した葉っぱを見ながら粘土で葉っぱ制作
学生が見守る中で葉っぱ制作	学生と語らいながら葉っぱ制作

「色のいろいろ ☆ デザインいろいろ、オリジナルバックを作ろう」

2

■ 実施日時

2015年5月16日(土) 13:00~16:30

■ 実施場所

九州産業大学2号館1階円形ホール他

■ ボランティア学生数

10名

九州産業大学美術館では展覧会鑑賞の後、そのイメージをコットンバッグにマスキングテープで表現したオリジナルバッグを制作した。



展覧会鑑賞	学生と一緒にマスキングテープでバックづくり
できたバックを嬉しそうに見せる子ども	作品鑑賞会

「種類のいろいろ ☆ チリモンストラップを作ろう」

3

■ 実施日時

2015年6月20日(土) 13:20~16:30

■ 実施場所

海の中道海洋生態科学館

■ ボランティア学生数

11名

海の中道海洋生態科学館ではプランクトンを採取し、顕微鏡で観察した。その後、様々な海の生き物のチリモンを使って、オリジナルキーホルダーを制作した。



プランクトン採取	プランクトンを顕微鏡で観察
学生と一緒にキーホルダー制作	学生と語らいながらキーホルダー制作

「思い出いろいろ ☆ ワorkshopでの思い出をお話して絵本をつくろう」

4

■ 実施日時

2015年7月18日(土) 11:00~17:00

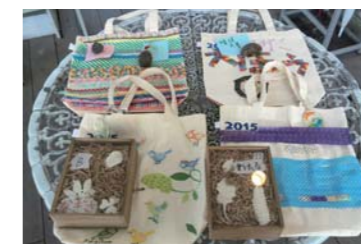
■ 実施場所

九州大学箱崎キャンパス21世紀交流プラザ

■ ボランティア学生数

11名

GLCworksの活動は、これまでの3回のリレー式ワークショップを振り返り、参加者の蓄積体験をもとに絵本を制作し読み語りを行った。



学生と一緒に絵本制作	制作した自分の絵本で読み語り会
1回から3回までの作品鑑賞会	修了式後の集合写真

○ 考察

事後アンケートを分析すると、参加後の子どもたちの感情・興味・関心の高まりが見られた。特に同じ子どもたちでの活動により、子どもたちのコミュニケーション能力の高まりが見られ、また4団体の特色を活かした「いろいろ」をテーマにしたワークショップに参加することで、表現の幅の広がりが認められた。その他、4団体の連携協力により、担当した学芸員は各館のワークショップの良さや違いを知ることができ、様々な視点から話あうことができた。このような他団体との交流は貴重な機会となり、今後の各団体のワークショップの充実が期待される。

7-3